

プログラム
参加者略歴
発表要旨

プログラム

<午 前>

開会セレモニー (9:30)

基調講演 (9:40)

スティーブン・バズィー (英・ウォルヴァーハンプトン大学教授)
「軍事戦略と紛争の想定外の拡大」

休憩

第1セッション「戦争の拡大」(10:30)

発表者

戸部 良一 (防衛大学校名誉教授)
「日中戦争の拡大と日本陸軍 1937年7月～1938年10月」

アラン・R・ミレット (米・ニューオーリンズ大学教授)
「『不意打ち』に驚かされることを嫌った将軍—ダグラス・マッカーサーと朝鮮半島 1950～1951年—」

アルバート・パラッツォ (オーストラリア陸軍研究センター所長)
「戦争の要請に応じて—オーストラリア陸軍とベトナム戦争—」

コメンテーター

花田 智之 (防衛研究所戦史研究センター戦史研究室主任研究官)

<午 後>

昼食休憩 (12:10～13:30)

第2セッション「作戦の拡大」(13:30)

発表者

フィロミーナ・バズイー (英・ウォルヴァーハンプトン大学リサーチ・アドミニストレーター (併) 講師)

「1915～16年のガリポリ作戦におけるイギリス軍の想定外の医療危機」

進藤 裕之 (防衛研究所戦史研究センター戦史研究室主任研究官)

「日本の南太平洋方面の作戦—1942～43年—」

ジェファリー・P・メガーギー (米・国立ホロコースト記念博物館上席応用研究官)

「破滅の拒絶—ドイツ軍統帥部とソ連における攻勢の失敗 1941年秋—」

コメンテーター

齋藤 達志 (防衛研究所戦史研究センター史料室所員)

休憩

第3セッション「総合討議」(15:30)

閉会セレモニー

発表者等紹介

発表者 (敬称略、発表順)

スティーブン・バズィー

現職：ウォルヴァーハンプトン大学教授

略歴：博士 (ケンブリッジ大学)

専門：1850年代以降の軍事史、1850年代以降の宣伝および軍—メディア関係、1750年代以降の軍事思想史、1850年代以降のイギリス軍事史

主要著書等：

The German Corpse Factory: A Study in First World War Propaganda. Helion, 2019 (forthcoming).

(co-editor with Gary Sheffield) "Chapter 14: Strategic Command," in Jay Winter, ed., *The Cambridge History of the First World War, Volume 1.* Cambridge University Press, 2014.

The British Army in Battle and Its Image 1914-1918. Continuum, 2009.

戸部 良一 (とべ・りょういち)

現職：防衛大学校名誉教授

略歴：博士 (京都大学)。防衛大学校人文社会科学群国際関係学科教授、帝京大学文学部史学科教授等を歴任。

専門：外交史、近代日本軍事史

主要著書等：

『ピース・フィーラー—支那事変和平工作の群像』(論創社、1991年)。

『日本の近代(9) 逆説の軍隊』(中央公論新社、1998年)。

『自壊の病理—日本陸軍の組織分析—』(日本経済新聞出版社、2017年)。

アラン・R・ミレット

現職：ニュー・オーリンズ大学教授、オハイオ州立大学名誉教授

略歴：博士 (オハイオ州立大学)。ニューオーリンズ大学アイゼンハワー・アメリカ研究所長、国際軍事史学会副会長を務める。オハイオ州立大学歴史学部教授等を経て、現職。国立第二次世界大戦博物館の主任歴史顧問を歴任。

専門：アメリカ軍事制度史、アメリカ安全保障政策史、20世紀のアメリカの軍事・戦争史

主要著書等：

The War for Korea, 1945-1950: A House Burning. University Press of Kansas, 2005.

The War for Korea, 1950-1951: They Came from the North. University Press of Kansas, 2010.

(with Peter Maslowski and William B. Feis) *For the Common Defense: A Military History of the United States from 1607 to 2012* (Third Edition). Free Press, 2012.

アルバート・パラッツォ

現職：オーストラリア陸軍研究センター所長（研究事項担当）

略歴：博士（オハイオ州立大学）。オーストラリア国防軍士官学校教官、陸軍研究センター
研究員等を経て、現職。

専門：オーストラリア陸軍史、現代の戦争の本質

主要著書等：

The Australian Army: A History of its Organisation, 1901-2001. Oxford University Press, 2001.

The Australian Army in Vietnam. Australian Army History Unit, 2006.

Forging Australian Land Power: A Primer (Army Research Paper). Commonwealth of Australia, 2015.

フィロミーナ・バズィー

現職：ウォルヴァーハンプトン大学リサーチ・アドミニストレーター（併）講師

略歴：博士（キングストン大学）

専門：戦争社会学、政治思想史

主要著書等：

(co-authored) *War, Journalism and History: War Correspondents in the Two World Wars.* Peter Lang, 2012.

“Care-giving and the Naval Nursing Service,” in Rhys Crawley & Michael Locicero, eds., *Gallipoli: New Perspectives on the Mediterranean Expeditionary Force 1915-16.* Helion, 2018.

“Vera Brittain: War Reporter 1939-1945,” in Yvonne McEwen & Fiona Fiskén, eds., *War, Journalism and History - War Correspondents in the Two World Wars.* Peter Lang, 2012.

進藤 裕之（しんどう ひろゆき）

現職：防衛省防衛研究所戦史研究センター戦史研究室主任研究官

略歴：修士（神戸大学）

専門：近代日本軍事史

主要著書等：

“The Japanese Army’s ‘Unplanned’ South Pacific Campaign,” Peter Dean, ed., *Australia 1942: In the Shadow of War*. Cambridge University Press, 2013.

“The Japanese Army’s Search for a New South Pacific Strategy, 1943,” Peter Dean, ed., *Australia 1943: The Liberation of New Guinea*. Cambridge University Press, 2014.

“Holding on the Finish: The Japanese Army in the South and Southwest Pacific, 1944-45,” Peter Dean, ed., *Australia 1944-45: Victory in the Pacific*. Cambridge University Press, 2016.

ジェファリー・P・メガーギー

現職：国立ホロコースト記念博物館上席応用研究官

略歴：博士（オハイオ州立大学）。21世紀安全保障連邦政府委員会研究員、国立第二次世界大戦博物館歴史顧問委員を歴任。

専門：近代ヨーロッパ軍事史、ホロコースト史

主要著書等：

Inside Hitler’s High Command. University Press of Kansas, 2000.

War of Annihilation: Combat and Genocide on the Eastern Front, 1941. Rowman & Littlefield, 2006.

Encyclopedia of Camps and Ghettos, 1933-1945. Indiana University Press, 2009 to present. （編集長、全7巻予定。）

コメンテーター（セッション順）

花田 智之（はなだ ともゆき）

現職：防衛研究所戦史研究センター戦史研究室主任研究官

略歴：博士（北海道大学）。防衛研究所助手、ロシア科学アカデミー東洋学研究所客員研究員などを経て、現職。

専門：ロシア政治史、ロシア軍事史

主要著書等：

『昭和史講義』（共著）ちくま新書、2015年。

『ソ連と東アジアの国際政治1919-1941』（共著）みすず書房、2017年。

「ソ連の対日参戦における国家防衛委員会の役割」『戦史研究年報』第21号、2018。

齋藤 達志（さいとう たつし）

現職：防衛研究所戦史研究センター史料室所員

略歴：修士（早稲田大学）

専門：近代日本軍事史

主要著書等：

「戦史研究のあるべき姿について—一つの見方として—」『陸戦研究』通巻第443号（2018年2月）。

「日本軍の上陸作戦に関する研究—陸海軍の典範令類の変遷を中心として—」『陸戦研究』通巻第443号（2017年10月）。

「西南戦争にみる日本陸軍統帥機関の成立過程とその苦悩」『軍事史学』第52巻第3号（2016年12月）。

司会者

石津 朋之 (いしづ ともゆき)

現職：防衛研究所戦史研究センター長 (併)国際紛争研究室室長

略歴：修士 (ロンドン大学キングス・カレッジ大学院)。ロンドン大学 LSE 大学院中退、オックスフォード大学大学院修了。防衛研究所主任研究官を経て現職。その間、併せてロンドン大学キングス・カレッジ名誉客員研究員、英国王立防衛安全保障研究所 (RUSI) 研究員を歴任。

専門：戦争学、平和学、世界戦争史、戦略思想

主要著書等：

『戦争学原論』筑摩書房、2013年。

『検証 太平洋戦争とその戦略 (全3巻)』(共著) 中央公論新社、2013年。

『リデルハートとリベラルな戦争観』中央公論新社、2008年。

立川 京一 (たちかわ きょういち)

現職：防衛研究所戦史研究センター戦史研究室長

学歴：博士 (上智大学)

専門：20世紀国際関係史

主要著書等：

『第二次世界大戦とフランス領インドシナー「日仏協力」の研究』彩流社、2000年。

(co-editor with Brian Bond) *British and Japanese Military Leadership in the Far Eastern War, 1941-1945*. London: Frank Cass, 2004.

『シー・パワー—その理論と実践』(共編著) 芙蓉書房出版、2008年。

発表要旨

基調講演

軍事戦略と紛争の想定外の拡大

スティーブン・バズィー

本報告において、紛争が想定外に拡大した結果として導入された軍事戦略を2つの視点から分析する。

1つは戦時において紛争が国家的な規模で拡大する場合、つまりグランド・ストラテジー（大戦略）の視点である。もう1つは、特定の作戦（キャンペーン）の展開に影響を与える想定外の拡大、つまり作戦レベルの視点である。

主に焦点を当てるのは、作戦を策定する参謀組織である。すなわち、敵側が想定外に紛争を拡大した場合への対応の他に、自らが紛争を拡大した結果として、想定していなかった状況が発生した場合への参謀組織の対応を検討する。取り上げた事例の大半が過去100年以内に起こったものである。つまり、先進国および組織化された軍（空軍を含む）の時代である。

軍事に関する理論は既に相当数、考え出されているが、これらを利用して分析する。そのような理論には紛争の拡大と似ているものもあり、例えば、戦略的奇襲、エスカレーション、政軍関係に関する理論がある。第一次世界大戦および第二次世界大戦（いずれも20世紀前半の、先進国同士で戦われた大規模かつ長期的な戦争であった）には、紛争の想定外の拡大とそれへの対応のいくつかの事例を見出すことができる。つまり、参戦国が次々と増えたことによる拡大である。

その次に到来した核兵器の時代においては、ある国家が紛争に新たに介入した明白な事例は少ないし、紛争の拡大を阻止するのに成功した事例が多いが、それでも紛争が想定外に拡大した例があった。

グランド・ストラテジーのレベルでは、紛争の想定外の拡大あるいはエスカレーションに対し、技術に依存した対応の是非が活発に議論されてきた。つまり、新しい「スーパーウェポン」を導入することにより、自国より数段強力な敵に対して勝利を得る考え方の是非についての議論である。しかし、画期的な新型兵器によって戦況を逆転する試みは度々行われているが、明らかに成功した例はない。

長期戦においては、想定外の拡大への対応として最も共通した課題は、対応を迫られた側による戦力の増強であった。それには地上軍の拡大、訓練、武装化が含まれ、海軍、空軍も対象となった場合がある。最も大きな要素は対応する時間的余裕があるか否かであった。

また、戦力が増強されるまでの間の敗北—これは大敗北である場合が多い—に対応するための戦略の決定、そして、大幅でしかも急速な戦力増強によって作戦・戦術レベルで様々な歪みが発生するが、その扱いが最大の問題であった。

同様の要素は一部の長期紛争にも影響があった。特に、20世紀後半と21世紀初頭の反乱・武装蜂起を制圧する戦争が顕著な例であった。装備あるいは戦闘のドクトリン（教義）を急激に更新する必要性が、即戦力となる戦力の増強と同じ程度に重要な課題であったのは、作戦レベルにおいてのみであった。

第1セッション

日中戦争の拡大と日本陸軍 1937年7月～1938年10月

戸部 良一

日中戦争（支那事変）は、日本陸軍の対応という観点から見ると、ほぼ5つの時期に分けられる。①盧溝橋事件から上海出兵まで（1937年7月～8月）、②全面戦争化と戦面不拡大方針（37年9月～38年3月）、③軍事的解決の模索（38年4月～10月）、④長期持久戦（38年11月～41年11月）、⑤太平洋戦争期（41年12月～45年8月）の5つである。このうち本報告では、紛争拡大期に相当する①から③までを扱う。

盧溝橋事件に対する陸軍の基本方針は、現地解決・事態不拡大であった。にもかかわらず陸軍は中国中央軍の脅威に備えて、満洲・朝鮮・日本本土から華北に援軍を送ることを決定する。ただし、本土からの出兵をめぐる論争があり、陸軍が本格的な武力行使に踏み切ったのは、盧溝橋事件の3週間後であった。

この段階で陸軍が目指したのは、北京・天津およびその周辺地域を制圧することであり、その目的は間もなく達成される。ところが、8月に上海で武力衝突が発生し、海軍は居留民保護のため陸軍に出兵を要求する。陸軍は上海への出兵に消極的だったが、海軍の要請を拒否できなかった。

戦火が華北から上海に飛び火して、紛争は全面戦争の様相を呈してくる。中国は全面抗戦に踏み切った。日本政府も事態不拡大方針を放棄した。ただし、日中両国とも宣戦布告をしなかった。陸軍は従来から中国との全面戦争を構想しておらず、この段階に至っても、できるだけ戦闘地域を広げないという戦面不拡大方針を追求した。北方のソ連の脅威に備える必要があったからである。陸軍は華北と上海で決戦を求め、中国を屈服させようとした。しかし、華北では中国軍の後退により決戦は現出せず、上海では予想以上の中国軍の抵抗により苦戦が続いた。

11月の杭州湾上陸によって上海の中国軍が総崩れとなると、現地では首都南京攻略を目指す動きが強くなる。陸軍首脳部に南京攻略の計画はなかったが、現地軍の要請を退けることができなかった。戦面不拡大方針にもかかわらず、戦闘地域は拡大したのである。南京攻略を中国との講和に結び付けることもできなかった。

首都陥落によっても中国が屈服しなかったため、陸軍は長期戦を覚悟せざるを得なかったが、それでも戦面不拡大方針を保持しようとした。それは、動員兵力の余裕がなくなったためでもある。ところが、またしても現地軍の要請によって、戦面不拡大方針は放棄さ

れる。華北に派遣された部隊が当面する敵軍を追って南下しているうちに、中国軍の大集団にぶつかったからである。こうして戦われた徐州会戦（38年5月）で日本軍は勝利するが、敵戦力の殲滅には成功しなかった。10月には広東、漢口を攻略するが、このときも軍事的勝利を講和に連動させることができなかった。この後、陸軍は戦力の限界に達し、戦闘地域を拡大せず、占領地域の治安維持に重点を置くことになった。

本報告では、以上のような日中戦争拡大の過程を踏まえ、日本陸軍が事態不拡大・戦面不拡大を基本方針としながら、なぜ意図せざる拡大に陥ってしまったのかの原因を探りたい。

第1セッション

「不意打ち」に驚かされることを嫌った將軍 —ダグラス・マッカーサーと朝鮮半島、1950～1951年—

アラン・R・ミレット

ダグラス・マッカーサーは、自分は戦略的直感に恵まれ、大胆な決断ができる戦域司令官であると自負していた。しかし、その割に彼は、戦略的・作戦的な「不意打ち」から立ち直るために、最高司令官として多くの時間を費やさなければならなかった。1941年から42年にかけてのフィリピン作戦は、多くの誤算があったことを露呈した。しかし、その全てをアメリカとフィリピンの守備部隊が脆弱であったことに帰することはできない。

朝鮮戦争の1年目も同様であった。またしてもマッカーサーは戦略的な「不意打ち」に何度も対処せざるを得なかった。1回目は1950年6月の北朝鮮による開戦であり、2回目は同年10月から11月にかけての中国の参戦であった。3回目の「不意打ち」は1951年4月に起こった。トルーマン大統領がマッカーサーを全て(3つの)戦域司令官のポストから解任し、彼を永久に引退に追い込んだ事態であった。

これら全ての「不意打ち」に対して、マッカーサーは態度が悪い將軍の役を演じた。つまり、彼は自分と関わりがあるあらゆる人物の責任にしたのである。それにも関わらず、戦略的な大惨事を食い止めることができたのは、見事な指揮振りに加えて、一般兵士が粘り強く戦ったからである。

第1セッション

戦争の要請に応じて—オーストラリア陸軍とベトナム戦争—

アルバート・パラッツォ

米国と南ベトナム共和国を支援して、オーストラリアが北ベトナムとの戦争に軍隊を派遣することを決定したとき、オーストラリア陸軍は全く準備ができていなかった。陸軍は兵力も装備も不足しており、政府が請け合った大隊規模のタスクフォースを編成するのは難事業だった。野戦部隊から個々の兵士を配置転換して、さらに訓練用の部隊からも人員を抽出して、この小さな責務にかろうじて応じることができた。戦争のピーク時に、オーストラリアのタスクフォースは旅団規模の兵力に増強され、そこには歩兵3個大隊のほか多様な支援部隊も含まれ、担当地域のプオク・トゥイの制圧に使用された。加えて、自軍の支援基地をブンタウに建設し、ヌイダットを拠点とするタスクフォースのニーズに応えた。これは更なる増強を見越した措置だった。

本報告では、オーストラリアのコミットメントの規模が数倍に膨れ上がった現象を取り上げ、この拡大をもたらした2つの主要因を検証する。2つの要因を軍事的必要性和政治的必要性と名付けることができる。どちらの必要性もベトナムへのオーストラリアの貢献の規模を決める役割を果たし、時には相乗的に、時には個別に、また時には相反する形で作用した。本報告は、戦力規模の増大と戦争後半における縮小に、これらの要因がどう作用したかを探る。2つの要因のうち政治的必要性がより重大で、軍事的ニーズは政府にとって二の次であったことを実証する。

第2セッション

1915～16年のガリポリ作戦におけるイギリス軍の想定外の医療危機

フィロミーナ・バズイー

本報告は、1915年2月から1916年1月までのガリポリ作戦（別名：ダーダネルス作戦）を通して、イギリス軍の参謀が即席に策定した医療に関する方針を分析する。

イギリス側は短い作戦を想定し、その前提で準備をした。その目的はイギリスの軍艦がダーダネルス海峡を通過し、オスマン帝国の首都コンスタンチノーブルを脅かすことであった。しかし、作戦開始から予想外に激しい抵抗に直面した。ガリポリの敵の陣地に対する最初の攻撃—成功しなかったが—は、艦砲射撃のみであった。

その後、4月にイギリス軍および大英帝国の他の領域の軍による、即席の上陸作戦が実行された。これは膠着状態に陥り、戦闘および病気による損害が大きかった。8月に2回目の上陸作戦が実行された。それは作戦全体を活性化させるのが目的であったが、膠着状態が悪化し、損害も増えた。地上作戦の当初よりガリポリにおけるイギリス側の司令官、サー・イアン・ハミルトン（Sir Ian Hamilton）大將は、傷病兵の後送と治療を最優先課題の一つと考えていた。イギリス側の死傷者は約21万3千名であったが、そのうちの約14万5千名が病気によるものであった。また、猛暑、ハエの大群、シラミ、極度の水不足が大変な問題であった、と参加した兵士たちは後に回顧している。

数ヶ月にわたり、参謀部および医療関係の高官は傷病兵を後送させるのに効果的な経路を設定した。それは前線の塹壕から水際まで延び、そこから小型舟艇を経て病院船（あるいは、非公式に傷病兵を運搬するのに動員された「暗黒の船」）に至り、最後は、近くにあったレムノス島、あるいは遠いところではマルタと、エジプトのアレキサンドリアに設営された野戦病院に到達した。

この後送の経路は最終的には非常に効果的に機能した。1916年1月にガリポリから残存兵を成功裏に、しかも犠牲も比較的少なく撤退させる作戦が実行されたが、その策定と実行の段階において、イギリス陸海軍それぞれの参謀が、上記の医療・衛生部隊による傷病兵の後送経路の設定と運用の方法および経験を非常に参考にしたほどであった。

第2セッション

日本の南太平洋方面の作戦—1942～43年—

進藤 裕之

太平洋戦争が開戦した時点では、陸海軍の主作戦は南方作戦であった。南太平洋については、ラバウルの攻略だけが決定されており、また、同方面は海軍の作戦担当地域と理解されていたので、陸軍は南海支隊が海軍に協力したのを除いて直接は関与しなかった。開戦後間もなく、海軍の主導でニューギニア（ラエ等）およびソロモン諸島（ツラギ島等）の攻略作戦が決定され、実行された。そして、米豪分断作戦も決定され、FS作戦として海軍はフィジー島、サモア島のような遠隔地の攻略作戦も計画した。陸軍も約10個大隊の戦力で協力することに合意した。

南太平洋への進攻が計画されている段階で、海軍も陸軍も南太平洋が太平洋戦争の主戦場の一つになるとは予想していなかった。ところが、最終的には海軍はソロモン諸島の争奪戦において多くの艦艇と航空機を失った。また、陸軍も最終的にニューギニアを中心に数个師団を投入することになり、ニューギニアだけで20数万名が戦病死した。そして、南太平洋方面で陸海軍（特に海軍）が消耗したことが影響して、その後の中部太平洋やフィリピン等の作戦において日本側は苦戦を強いられた。

そこで、本報告において、開戦時あるいはその直後に日本側が南太平洋に進攻することを決定した際に、どの程度（規模）の作戦になると考えていたのか、そして、アメリカ軍がガダルカナルに進攻したこと等により、当初の予想を超えた戦力の投入がますます必要になる戦況となった際に日本側がどのように対応したのかを検討する。そして、日本側の南太平洋における経験は作戦が想定外に拡大してしまった例であるが、拡大する過程における陸海軍の対応に焦点を当てる。

第2セッション

破滅の拒絶—ドイツ統帥部とソ連における攻勢の失敗 1941年秋—

ジェファリー・P・メガーギー

1941年6月22日、ドイツ軍すなわちドイツ国防軍はソビエト侵攻を開始した。自信満々であった。前年にはヨーロッパ大陸最強と目されたフランス陸軍を僅か数週間で撃破していた。しかもソ連の赤軍には、近代的な作戦遂行能力がありそうになかった。部隊は訓練されておらず、スターリンの粛清（パージ）により将校団は骨抜き状態にあった。一撃を加えれば、建物全体が崩壊するとドイツは考えた。戦いは数週間で決着が付くはずだった。実のところ、夏には赫々たる戦果を収め、ソ連の戦死者や捕虜は数十万人に上った。勝利は目前とドイツ軍の指導者は確信した。

ところが、秋になるやドイツの事情は悪化し始める。死傷者が続出した。兵站が需要に追いつかない。天候は悪化する。最も重要なことは、ソ連が崩壊の兆しを見せないことだった。

10月、ドイツは「タイフーン作戦」に打って出る。モスクワに最後のひと突きを加えたら、ソ連最後の予備兵力は壊滅し、戦争に勝利できるとの自信があった。当初の成果は上々だったが、やがて秋雨が降り始め冬に入ると、12月初めまでにはソ連の不断の抵抗でドイツの攻撃がとうとう、頓挫した。赤軍は大挙してすぐさま大反撃に転じ、ドイツ軍は窮地に陥った。

攻撃が停滞するにつれて、ドイツの将軍たちは、否認、落胆、長期的楽観の入り交じった態度を示すようになる。最大の野心的目標だけを徐々に放棄するようになる。秋にコーカサス地方からイランへ進軍し、英国の中東における支配を脅かす企図はその1つである。ソ連には予備兵力が残っていることを終局間際まで信じようとしなかった。その結果、不可能な攻勢作戦に兵力を投じ、冬期作戦に備える機会を失した。しかもヒトラーが米国に宣戦布告した後でさえ、将軍たちは戦略状況を楽観視していた。つまり、1942年にはソ連に勝利し、その後米国に勝つことに集中できるというのである。独ソ戦の全期間を通じて、バルバロッサの計画立案を左右した基本姿勢が、その後もドイツの行動を支配したのである。

紛争の想定外の拡大

令和元年度戦争史研究国際フォーラム報告書

発行日 令和2年9月1日

編集・発行 防衛省防衛研究所

〒162-8808

東京都新宿区市谷本村町5-1

電話：03-3260-3011

FAX：03-3260-3034